

自由われらの園 国府高校100周年

今年創立百周年を迎え、地域社会に三万三千人以上の卒業生を送り出してきた国府高校(豊川市)。卒業生インタビューの初回は、高校卒業後、米國留学を経てラジオDJとして活躍する小林拓一郎さん(41)に高校時代の思い出などを語ってもらいました。

(聞き手・川合道子)

—高校時代の思い出は
バスケットボールが一番
の思い出です。入学してバ

スケ部に入り、二年夏からキャプテンをしました。当時は指導してくれる先生がいなくて、自分なりに勉強して練習メニューを考えていました。部員は二十人ぐらいいましたが、弱かったし、みんな来なかった。練習試合に四人しか集まらず、相手に「一人お借りしていいですか?」と頼んだことも。自分の求心力のなさ、人望のなさを感じました。

最後の大会はボロ負けだったと思います。でも僕が部員の前で「駄目なキャプテンで情けなかったけど、

卒業生インタビュー編①

ラジオDJ 小林 拓一郎さん(41)



こばやし・たくいちろう 1979年生まれ、豊川市牛久保町出身。ラジオ局「ZIP-FM」で学生向けの番組「Mirror Park」などを担当。国内プロバスケットボールBリーグ「シーホース三河」のホームコートMC、とよかわ観光大使を務める。今年8月、豊川市内に誰でも無料で楽しめるバスケットコート「グレープ・パーク・コート」を開設した。

自由だからこそ考える

したら、練習に来なかった部員たちが「おまえは悪くない」って号泣したのを感じています。求心力はなかったけど、諦めないで「やるうぜ」と声だけは掛け続けた。卒業するときにもらった色紙には「どんな状況でも腐らずにやっていた姿はあこがれでした」といったメッセージが裏までびっしり書いてありました。

自由で、勉強も部活も強制されることはありませんでした。ただ、自由だからこそ常にどう行動するかを考えていました。バスケット部で「教えてくれる人がいてくれたら」とない物ねだりをしていて自分もいたけど、結局動かないと何も始まりません。ある意味、人生で一番厳しいことを教えてくれたかもしれない。与えられると思つなよ、と。

—国府高校での経験が今に生きていることは
高校時代は「こんなに何も無いのか」と思つくらい

今は情報過多の時代。情報が多いが故に、自分の世界を狭くしてしまっている人も多いと思つ。海みだいに情報があふれているところに飛び込むくらいなら、自分の好きなことだけの世界にとどまろう、と。スマートフォンを開けば自分好みの広告がどんどん出てくる。下手すると、レールに乗っかっているように、人生を送ることができてしまうかもしれない。

これからの世の中、情報を取捨選択し、自分で考える力が必要だと思う。それを自由な校風の中で学んでほしいなと思います。何もなしとこから何かをクリエイト(創造)してほしい。別に物を作るのだけじゃない。自分の人生をクリエイトしていくことが大切だと思つています。